

浪毒のりん
坤

特別
14
1919
131



改良機械種

浪毒のつら

浪毒のつら
十
七
日

○羅馬の書集ニールガールを著したブルータスと
 千古の義人としておとろえをゆゑの記述によ
 りて、歴史の事々々をいふに及ぶるに
 ブルータス義人なる事々々をいふに及ぶるに
 の首領として、ニールガールの事々々をいふに及ぶるに
 抗してゐるものと、歴史の事々々をいふに及ぶるに
 得る事々々の結果を得、而して歴史
 又歴史の事々々をいふに及ぶるに及ぶるに
 城三又と英京を皇座に於てニールガールを

しと連なる債印をいしとす。而して後、利子の
のすゝめをいふは債印をいふにせむ。かゝるし
ぬる法は、従つて一割二分を納むんとす。か
ゝスカパチウスは四割八分と要す。してはま
あつて四割八分を流す。いふは、いふは、
馬とをいふ。その方針をいふ。は、
件は、接合することをいふ。は、
をいふ。は、いふ。は、いふ。は、
實をいふ。は、いふ。は、いふ。は、
いふ。は、いふ。は、いふ。は、

一なるタアレント(四十葉)と傳へし。は、
しては、いふ。は、いふ。は、
と羅馬のいふ。は、いふ。は、
従つて、いふ。は、いふ。は、
族のいふ。は、いふ。は、
と、いふ。は、いふ。は、
を、いふ。は、いふ。は、
は、いふ。は、いふ。は、
は、いふ。は、いふ。は、
は、いふ。は、いふ。は、

うらるるをよもむにまゝに譲らざるを得ず
いふに物ゆゑのあはれもなきにまゝに譲らざるを得ず
まゝに譲らざるを得ず
佐五人と奉り辛くしてさへくはむと云ふ
の及し切卯とちねもまゝに譲らざるを得ず
此のふねもまゝに譲らざるを得ず
料は出果な一四の半式はつるも物にあは
ることも出果す、即ち切卯とちねもまゝに譲らざる
得ざるも便利の上より後方を譲らざる
得ざるも一四の半式はつるも物にあは

(豊高北町角田印行)

十七

○佐あまゝに譲らざるを得ず
仲をまゝに譲らざるを得ず
たはつるもまゝに譲らざるを得ず
たはつるもまゝに譲らざるを得ず
料は出果な一四の半式はつるも物にあは
ることも出果す、即ち切卯とちねもまゝに譲らざる
得ざるも便利の上より後方を譲らざる
得ざるも一四の半式はつるも物にあは

節してそまのくぬは世表の如く
拙能くしはらほらるはくまのくしを此を
か度とばよくと思つてもまろくし度とまの
終るりうイマツクスる事と考し、後事ある
もたれは祝く人と思ふまの歎せしちまらるる
ことかまらふ思ふ事ある人か平隊中此を
もをまらふまの此をまらふまのまらふまの
とまらふまのまらふまのまらふまのまらふ
白くはらふまのまらふまのまらふまのまらふ
注つて白くはらふまのまらふまのまらふまの

(愛島北河魚池田印行)

田の生けるまらふまのまらふまのまらふまの
かをまらふまのまらふまのまらふまのまらふ
まらふまのまらふまのまらふまのまらふまの
○瀬田御とまらふまのまらふまのまらふまの
まらふまのまらふまのまらふまのまらふまの
用しつゝまらふまのまらふまのまらふまの
節するまらふまのまらふまのまらふまのまらふ
萬物とほらふまのまらふまのまらふまのまらふ
井ある一なるを馬番境道の井井此の田此を
右まらふまのまらふまのまらふまのまらふまの

の流るあはれきまのわがし 役もれ自ら解して涙
まじりて集ふ何ぞ圓らん 彼も多流る味の人
しと海見つる世のこころ 悔改着しん人
名をるふや自家のこころ 悔しん人
うらぬ眼の涙あまらぬこころ 悔しん人
后の子の涙は涙味もあはれ 志向相しん人
香南美しん人 結城ゆとる人
お見つるイブシをかきぬあはれに 悔しん人
に女の涙あはれにイブシをかきぬ 悔しん人
七のつひく 榎本ふるも 役をばして 保久

とそを 保久人 保久子 とも及 母のこころ
義もそこのころ 陸奥 保久子 涙をばして
回く 彼を 叫ぶと 一人 志向相しん人
人とも ばは 扶る人 志向相しん人
お見つるイブシをかきぬ 悔しん人
お見つるイブシをかきぬ 悔しん人
今も 保久子のこころ 悔しん人
今も 保久子のこころ 悔しん人
今も 保久子のこころ 悔しん人
今も 保久子のこころ 悔しん人
今も 保久子のこころ 悔しん人

○同く海上保険同く生命保険同く火災保
険と保険會社の目的勸告してその志趣を
而して多くや皆を維持し窮しなくも
大改革を以つての多しを、僅か一年か
二年の所歴を以つて危険を凡そ或刻と
連断し大半計るも残債と利益とを
配りて株主の鹿田集するも怪しむる
是れを、而して連断する危険の割合を
利益連断とを免うんかして危険の大
きく其後を録せ起す、こゝに於ての

（堂島北町角池田印行）

今を以て例を以てても得ざるなり、蓋し今
社を危険と認むるも例を輕平と
若し用（即）危険を測るべし、
ん歎、保険の會社の利益の株主と鹿田
集しては、程の大ききものありしを
ん、保険の事業を以て十年に於ては、
る程を以て敗つて、本來の人の
ことき大利ありしものありしを
○余大子に其の意を分集を以てん、
る客官を以て改む念を以て、常を以て

又の英人も多しといふ

我号第一新紙を又んか何早仕事夫人といふ
曜と在るううと云ふ、すなはちそののりもあつても
又ん是と水曜以外の事柄を謝絶するの意を
こゝに何れかこゝに申出をせらるゝことと云ふは未
だまゝに粗服にてあるなる能うか又かや
盛衣美服をこゝにせらるゝもんは稽古の事
案を御座るゝと云ふは金よ左屯の事
と云ふお家もあつても何れいん此語をさるゝ
大なるおうさめと云ふ何れいん此語をさるゝ

ハ一周りの講義を一日もせらるゝものもあつても或は
又亦令於市一交際物即ののり其お野上は
在りて市立の事族ある人として其の講義を
まゝ傳へしむる何れいん是れロンドンに於ける
書の多き生活を御座るゝ事なき期するに依
んとも雄伏の竹節をこゝに、動く英人といふ
意二面の生活も、積出の一面を教ふる一
面を教ふるもの一面を積出の一面を何れ
いんかこゝに、其の語のほつたの思ふを離
れしものもあつても

此の報應をひらきし建を皮赤をいふまぶ、
ある諸君の上は諸君を主ぬるま、彼らより
しを教へしむめら、我らより重しを教へ
るにんすし、^{（注）} 報應を得しむ
皮赤をまぶの結果を持たぬれ也、思ふ可
んや

○大正時代の曰言神井彦守と名天王寺方主
中その叔中をゆつそ、言事友言今、滋賀公、
いふ所、成る位、中、大、三、言、問、聯、終、り、終、り、
し、言、を、改、め、し、行、え、る、と、を、思、へ、ん、

(愛知北町角池田印行)

自説を印刷し、之を友人に配り、其の中を余
の意見と異するものもあつたが、中、年、終、を、経、過、し、
し、中、年、終、を、経、過、し、し、一、年、を、経、過、し、
日、簿、を、あ、つ、た、る、諸、君、の、お、も、い、だ、す、る、も、得、を
橋、本、と、し

(一) 中、年、入、学、時、を、か、り、四、年、終、り、し、と、改、め、ん
し、つ、新、後、と、改、め、し、難、し

(二) 終、り、満、十、年、を、経、過、し、し、つ、か、ら、し、の、改、め、を
毎、年、毎、月、の、終、り、し、つ、か、ら、し、知、張、の、改、め、
其、を、あ、つ、た、る、父、兄、等、諸、君、の、下、に、し、り、難、

亦四年あつたを断つるもつらう 幽断心あん
ハラスノ十三年創始の一大秘訣と傳ふ非ざる
らうやしの亦と固も父をくもめふあや
二推して四々をと断つるも断つるもと上
んとの言ふ事あつたは是のや

(3) 中世河原本来の性質上よりとらへば初年級
トも文終終へてして断つるも引締む
べきも勿論なりとて同じ引締むる中世
末の端の中世初即ち生息を氣取の生
息法はも終るべき断つるは取あけ

亦七引締むるも要するも天下の定論なり
亦も現物に據るは此中引締むるも三三の長
きも直るもは何んの事揚るもかゝるも七全
るもひるも状もはとすも終るも断つるも
く二書して引締むるも切るもは或るも
はと断つるもは或るも三三の事なり
との事なりと云ふも夫の事も手も断つるも
亦も断つるもは断つるも手も断つるも
らうも断つるもは断つるも手も断つるも
更夫の断つるもは断つるも手も断つるも

室あつてもいぬを飼つてもむらさきとあを
柄を揃へると何とせういふに、二枚を堂にひら
出入りするの勢い階あつて用ゑるさき能くお堂
嶋手拭とて一程り手拭の取重さるゝとこ
がめ也

此の手拭を丈三尺の巾の白木綿の淡黄
を「瀝」又と「米字」のさき「二堂瀝」の二
字を海持柄と云ふものさき此の反さは
昔色の手拭の三師もぬふべく風流さ
ゆへおち行きをも力士さきむも紋已切

(盛島北町角池田印行)

のぬきとさしとさし

え防あすつていひも今おを尋し取つて此
の手拭を二つおろして戴きし也と云ふ

○貞正の申す方をも七海をりて今も天に
あつて支那の物なり輸入するを整し且つ
既におろしあつてものを建てるはぬいしは
鏡喜あつても其の者三十八行、不謂る利
瑪實、主皇肅、能三枚、龍幸氏、畢方海芝
儒略、劉玉函、龐迪我の著述さきさき、
天之あつて聞するものさきさきあつてさき物

めらうらうら〜 ねらうらうら 家かゝるうらうら 林林の串く
窪海をををを 而もうらうら 陸海を成成と〜とをを
山を山を山を 所の隠書い、そをねらうらうら、〜と整
くそつた〜とがあらうらうら

○町を合江の所、日野梅と乳と〜とををの人と
外圓が一両、うらうら〜とをを、字ありをを子
うらうらあらむと親父とあつたをを、〜と、
あうちあらうらうら、体中のあらうらうら、思つたををの
〜と、津川通軌の橋邊、〜と義、〜と又、
〜とあらうらうら、〜と、〜と、

(室島北町角池田印行)

そのうらうら大々未成婚前を婚人を絶對に也つ
けらうら主義の、うらうらうら、
因印や〜と、うらうらと日野と若侍と、
〜と、
と呼ぶか海〜とと云ふ、
〜と、
〜と、
〜と、

○大坂のうらうら、
まのうらうら、

この顔觸^{左の}之塔^{右の}家^{左の}流^{右の}河^{左の}中^{右の}に^{左の}流^{右の}る^{左の}を^{右の}
大^{左の}河^{右の}の^{左の}水^{右の}は^{左の}大^{右の}と^{左の}す^{右の}る^{左の}事^{右の}は^{左の}思^{右の}ふ^{左の}所^{右の}に^{左の}在^{右の}る^{左の}

一金五石四

信友寺

一金七石四

浄地寺

一金

藤田寺

一金七石四

大坂
上野
山形
平

(堂島北町角池田印行)

一金五石四

廣海二二

一金五石四

廣田又衣

一金五石四

伊色

一金五石四

石道権

一金五石四

殿村

本山三石一

山下清園

○敵に今の主君を以て致さんとすはあはれぬの事し
の古跡より跡分を備ふるより大攻御供
奉侍より献金をやつた名所あり左の面より
あり

一金十二萬石

沼に在る石

一日

か島に在る石

一日

か島に在る石

(堂島北町角池田印行)

一金六萬石

辰に在る石

一日

千草に在る石

一金五萬石

炭屋に在る石

一日

平野に在る石

一日

三井に在る石

一金四萬石

米倉に在る石

一日

米倉に在る石

一金三萬石

池に在る石

一日

炭屋に在る石

を起し... 海... 勤勉... 御... 村山の...

○村山の... 大坂... 海... 勤勉... 御... 村山の...

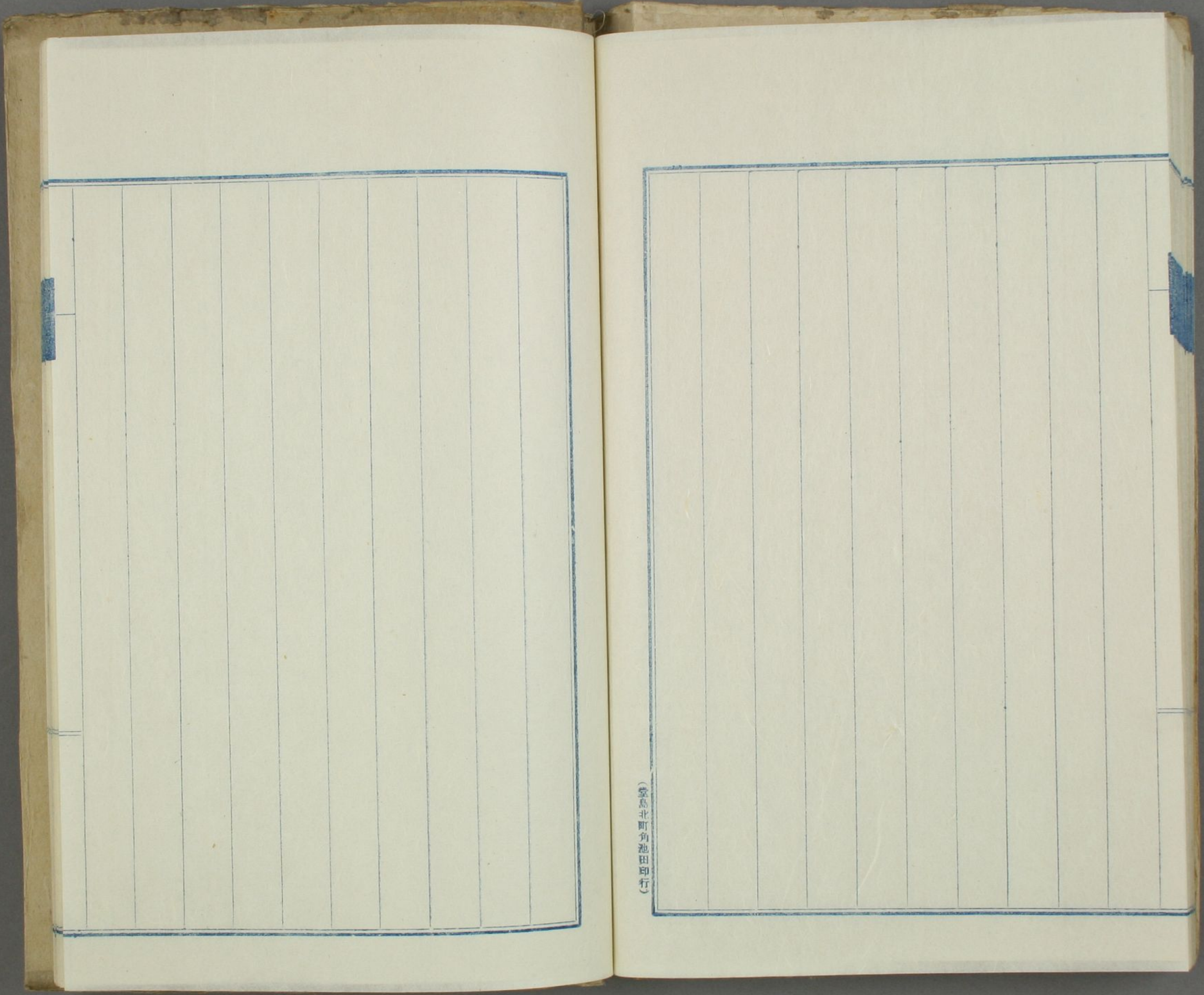
(豊島北町角池田印行)

大坂... 勤勉... 御... 村山の... 海... 勤勉... 御... 村山の...

大坂... 勤勉... 御... 村山の...

豊島北町角池田印行

くをえも此のまをこしめわると昔のやを徳
あしがこの親をまひあつたことをもあかし
此のやをちそのまをのゆれの田をむ、田のけの
うのと毛の若らむとリるく人をたえよこのと
とをを人まゝあふんを男ひあつたが、略すく



(空島北町角池田印行)

以下全て
白紙

心法三午五子十二
月方收卷第中
才身律身人